「未来への証言」

藤平　典
弥生町六丁目

はじめに

私が「被爆者手帳」を申請し、被爆者として自分を認めたのは、一九六七（昭和四二）年からです。

戦後、私は〝被爆者〟という言葉から逃げ回っていました。なぜかというと、当時日本はアメリカの占領下で、プレスコードという統制があり、原爆の話はアメリカ軍の最高機密として、被爆の実情を訴えることは禁止されていたからです。（生き残った多くの被爆者は、この時期に苦しみさえ訴えることも出来ず、政治的にも放置されて死んでいったのです。）

私が思い出したくなかったのは、それだけではありません。あの〝地獄〟から自分だけが〝生き残った〟という負い目があったのです。原爆は〝人間の想像を絶した地獄を現出〟し、〝原爆がもたらした社会の破壊という極限状況のもとでは、人々はお互いに助け合うことはできなかった〟のです。

広島で被爆した八月六日は、私が十七歳になる三日前です。当時、旧制中学校は四年で卒業させられたので、今でいえば高校二年生です。戦争中といえども、少年らしい夢もあり、柔らかな心を持っていた私たちが、そこで見たもの、体験させられたことは、まさに地獄でした。

そして、その後突然襲ってきた「急性原爆症」、その後見聞きした被爆者への差別、こうしたことから、私は心理的に原爆被害を拒否し、体験を忘れよう、思い出したくないと十数年過ごしてきました。

被爆体験を思い出す

十数年も原爆のことを忘れようとしていたので、何時ごろ広島に行き、どんな被害にあい、何日に家に帰ったのかも忘れていました。

それを思い出させたのは、父の死でした。父は一九六二（昭和三七）年七月に亡くなりました。その後始末をしていた時、母が「これはお父さんが大事にとっておいたものだよ」と渡してくれたのが、「広島高等師範学校報国隊」と書いてある腕章と、ボロボロになった日記でした。腕章は真っ黒に汚れ、とこ

ろどころ血が滲(にじ)んでいました。

日記には、昭和二〇年三月から十二月までの記録が書かれていました。腕章は確かに原爆投下の日に私が身につけていたことを僅(わず)かながら思い出しました。しかし、日記に八月六日当日のことも書いてありますが、何時(いつ)、何処(どこ)で書いたのか、原爆で寮が焼かれ、荷物もみな焼けてしまったのに、どうして残っていたのか思い出せません。また、日記の中に八月五日に母へ出した葉書がはさんでありました。私が死んでいれば遺書になったものです。

この腕章と日記を見ているうちに、忘れようとしていた原爆の時のことを思い出してしまいました。それだけでなく、日記に書いてないことまで思い出してしまいました。十六歳の少年の頭脳に刻み込まれた記憶が動き出してしまったのです。それから眠れない夜が続きました。

思い出した被爆体験

日記によると、軍国少年だった中学生時代の姿や、広島高等師範学校に合格しましたが、戦況が厳しくなり、学徒動員先の仕事が忙しく、なかなか入学許可が下りなかったことが記されています。やっと許可が下りて広島に着いたのが、七月二七日でした。

●七月二七日(金)　広島駅着十六時二二分。学校の寮(淳風寮(じゅんぷうりょう))にはいる。

●七月二八日(土)　休日。荷物整理、一日中空襲警報。宇品、呉方面爆撃。広島はまだ健在である。

その後は、入学式、入所式などがあり、八月一日からヒロ三二五一工場(東洋工業向洋工場(むかいなだ))〔四・一キロ〕へ学徒動員されました。八月五日は(日)は休日でした。寮に赤痢(せきり)が発生して、外出禁止でがっかりしたことが書かれています。また、この日、母へ手紙を書いたと記されていました。

〔八月六日(月)　晴れ〕の日記をもとに思い出したことをまとめてみます。

●朝、学校農園に残る者の募集、希望すれどはずされる。(私は戦後しばらく運命論者になっていた時があります。この時、農園に残れば原爆で即死していたでしょう。また、五日に原爆が投下されていたら、寮で死んでいたはずだからです。)

●工場の講堂で話が始まろうとした時、目の前でフラッシュがたかれたような明るさと熱さを感じた。「何だろう?」と思った瞬間、ガシャという音、南側のガラスが飛んだ。(窓際にいた教授が、後ろからガラスをうけて血を流した顔や、そして本能的に頭をかかえ、椅子の下に潜り込んだことなどを思い出します。)

この後の記録は、あまり具体的でなく、抽象的(ちゅうしょうてき)な言葉が多くなりますが、それを書いた私にとって、具体的な事柄を思い出

すのに充分でした。しかし、その事柄は系統だっていません。
その瞬間、瞬間が、映画の一コマ一コマを見るように浮かんできます。それをまとめてみますと、

●ガラスがガシャときた時、下の工場からギャーという女の人の悲鳴が聞こえた。「空襲だ！」と思った。「空襲警報は解除になったはずなのに」と思う気持ちがあった。ともかく、みんな我先に階段をおり、防空壕に飛び込んだ。

●すこし時間が過ぎた。周囲は静かである。壕から出てみると、工場の屋根は飛ばされ、ガラスが飛んでいる。すると友人が「あれは何だ」と西の空を指さした。青い空にあの「きのこ雲」がぐんぐん大きく上がっていた。一番上が真っ白、そして中のところは赤みがかり、下は黒く、そして地上に面するところは真っ赤で、広島市全市が燃えているらしい。

ともかく「何かが起こった」単なる空襲ではない。急遽、学生は向洋駅前の広場に集合させられる。教授たちが相談している。その頃になると、駅と工場の間の道路を歩き、広島からの負傷者たちが避難してきた。

異形な姿だった。衣服はボロボロ、全身が火傷したらしく、垂れ下がった皮膚をぶらさげていた。最初に避難してきた人々は、白い薬を塗っていたが（チンク油という火傷の薬であることを後で知った）だんだん後になると、車の油ではないかと思うような黒いものを塗っていた。この避難してきた人々の中に、自分も傷つきながら、一番ひどい重傷の人を戸板にのせて、お互い励まし会い、避難していた朝鮮の人達がいた。（当時、私は朝鮮の人達や、中国の人達への民族差別の感情を持っていましたが、戦後、民族差別の気持ちがなくなったのは、このことからでした。）

●結局、学校に残っている人たちの救援のために、向洋を出発した。（広島に来たばかりの私にとっては、どこをどう歩いたのか分かりません。ただ、宇品方面から、御幸橋に入りました）御幸橋の石の欄干が両側とも倒れ、一方は川の中に落ちていた。どんな力が作用し、何が起きたのか、わからない。無我夢中であった。

●御幸橋で傷だらけの憲兵に入市を止められる。広島がやられた原因がわからない、当時の最大の爆弾でも、こんな被害はおきない。スパイが広島の火薬庫に一斉に火をつけたのではないかということ。ともかく、軍も警察も混乱状態。しかし、私たちの身分が明らかになって、直ちに救助作業に入ることになる。

●まず、大学にいる学友たちの救助のため、学校に向かう。大学の校庭に数百人の負傷者がいるということだったが、校庭にいる両側の校舎が焼けており、学校に入れず、救助しようとしても、できない。それで周辺の壊れた家の下敷

きになっている人々の救助に移る。火が燃え移ってくる。物凄い爆風のため、家はひどく壊されているので、人が下敷きになっていることが判っても、救い出せず、次に移らざるを得なかった。生きている人が判っていても、見殺しにせざるを得なかった。

●守衛さんの奥さんが重傷だから、病院に運んで欲しいと頼まれ、奥さんを戸板にのせて病院へ運ぶ（この病院はどこにあったのか、今でもわかりません）。病院もメチャクチャに壊され、広場には炎天下、負傷者がマグロのように寝かされている。お医者さんも看護婦さんも負傷しており、薬といっても赤チンをぬる程度。「水をくれ！水をください！」というううめき声が満ちている。足をつかまれたので、下を見ると「水をくれ！」と訴える人がいた。その人の顔は、眼玉が飛び出し、ガラン洞の顔になっている。火傷がひどく、身体を動かそうとして手を持つと、皮膚がこちらの手にべったりついてくる。

●それからどのような救助作業をしたか、断片的にしか思い出せない。電鉄前で何もない道路に馬が倒れていたこと、小学校の講堂跡に鉄兜と骨の山があったこと（これは数日後のことではないかと思います）。ある公園で子供の名前を呼びながら探している母親の姿が、狂っているようだったこと。川辺でやっと救援にきた海兵隊から、乾パンと握り飯をもらって、死人を運んだままの手で食べたことなど。

●夕刻、寮が焼けてしまったので、一応、東洋工業に帰ることになった。その途中「全身焼かれて皮膚をむかれた同級生（四国出身）に会う」（日記から）名前が思いだせない。彼は戦後学校に復帰していないので、亡くなったのであろう。

日記には最後にこう記録しています。

「災害、筆舌に表し難し、惨状眼もあてられず。広島市全滅のごとし、学友も三〇数名行方不明」

この夜は東洋工業の板の間のところに、靴をはいたまま横になりましたが、眠れませんでした。

昨日の救済作業中に、足に釘を踏み抜いていたのを感じないままに、作業をしていましたが、翌朝になって痛みだし、そのために負傷者の看護にまわされました。看護といっても、薬はなく、何もないので、声をかけて力づける以外ありませんでした。その後、負傷者の看病や死体処理の手伝いらしいものをしていたようです。

しかし、連日の救助作業。食料も充分になく、衣類は全部焼かれており、帰省運動もおきました。ソ連の参戦などもあり、帰省が許可されたのは十日の夜で、やっと家に着いたのが、十二日の午後三時ころでした。家では、「新型爆弾が投下されたと聞いたので、もう、息子は死んだと思っていた」と母は言って

いました。

被爆者として生きて

その年の九月十五日、「急性原爆症」に突如として襲われました。敗戦で、もう学生にはもどれない、百姓で生きていこうと思い、畑で草取りをしていた時、炎天下で悪寒がしはじめ激しい寒さに襲われ、皆に支えられて家に帰って寝ました。最初は日射病だろうと思っていました。

ところが口がぬるぬるするので、唾を吐くと血が出て、歯肉が真っ赤にはれあがり出血していました。そのうち激しい下痢、発熱、脱毛、全身の倦怠感が起こりました。医師が来てくれましたが、原因がわかりません。栄養剤の注射で身体をもたせました。こうした危篤のような日が一週間ほど続きましたが、そのうちにだんだん身体が回復してきました。

あとで「急性放射能障害—急性原爆症」とわかりました。私は、それでも幸運な方だったのです。故郷もあり、両親も、医師もいました。しかし広島の人々はどうだったのでしょうか。家どころか、家族をなくし、医師も、病院も破壊されてしまっていたのです。それも戦後、私の〝負い目〟になっていたのかも知れません。

父の死後、被害者として生きるかどうか悩みました。しかし、私を被害者として意識させたのは、ビキニ環礁での水爆実験による被災をきっかけとした「原水爆禁止運動」でした。

「核兵器実験禁止・核兵器をなくせ」という国民的運動が広がる中で、多くの人々が「被爆の実相と被爆者の願い」を訴えるのを聞き、被爆者である私はいったいこの十数年間、何をしていたのか、原爆被害を、原爆の恐ろしさを、実際に身に体験している自分たちが訴えなければ、あの地獄の中で殺された人々の死は何だったのか。

無駄な死にさせるのか、死んだ人が語れない以上、地獄を繰り返させないために、生き残った者が語り継がねばならないのではないだろうか。そこに私たちが生きてきた意味があるのではないか、と考えるようになりました。また、中野区の被爆者の方々の助け合いも力づけてくれました。

被爆者の願い

被爆者の願いは、「ふたたび被爆者をつくらない」ということです。私たちが受けたような被害を、私たちの子、孫、そして世界の誰にもさせてはならない、ということです。そのためには、核兵器をこの地上から廃絶して欲しいのです。

それと国がおこした戦争の結果、被爆者がうまれたのです。だから国が、「再び被爆者をつくらない」という約束として、「非核の証」となる「国家補償の被爆者援護法」の制定をして欲しいのです。その意味で、国は戦争責任を明らかにし、一般国民の戦争犠牲者にも国家補償の援護をして欲しいのです。